

能楽雑感（117）～軸足

2019年 03月 16日

昨年秋から、会友の中の何人かが、仕舞の稽古を始めて、その手ほどきをしている最中に、ふと疑問に思ったことは、仕舞の初めと舞い納めのときに下居しますが、このときには、左膝を立て、右ひざを舞台に付ける姿勢をとります。何故、左ひざを立てるのか、ふと、疑問に思っていました。

同様に、仕舞でも演能においても、静止した状態から踏み出す時に左足から出るのは何故か、また、歩行において、出る足と出る手が一致する「上方歩き」をするのは如何なる理由によるものなのか・・・

長らく、心に引っかかっていた疑問でした。

それが、なんと、昨夜のNHKの人気番組「チョコちゃんに叱られる」を見て、氷解しました。

この番組では、「なんで自転車に乗るときに左側から乗るの？」という問いかけでしたが、その答えは、左足が「軸足」だから自転車に乗るときに安定感を得られるから・・・

そして、左足が「軸足」となり、右足が「利き足」となるのは、人間が生を受けてまだ、胎児のころ母親の胎内における頭部の位置に起因すると言うのですが・・・。

能舞台においても、摺り足そのものが体勢を安定させるためのものですが、体勢の安定のためには、軸足の役割が極めて重要であることは論をまたないところであります。

足拍子の多くが左足から始まることも、開やサシの型が右足で終わることも、軸足である左足で体勢を安定させてからのことでしょうし、一方、サシ込みや胸サシのような攻撃的な型が、利き足である右足で決めることも、共に納得できることです。

1. このテーマは、内容からして、こはぜの呟きにも掲載してみようと思います
2. 能楽雑感もかなりの掲載回数になったと思ったので、遡って数えてみたところ
図らずも100回を超えていました。今後、回数を表示させていただきます

能楽雑感～仕舞地謡の無本化

2017年 05月 14日

2月末のこと、湯河原の豊仙で、白謡会の懇親謡会が催されましたが、その夜の懇親会の後、一部の人が集まって、白謡会の在り方について議論しました。

その中で、春と秋の横浜能楽堂では、無本による独吟を積極的に取り入れるべきだと言う意見と、仕舞地謡の無本化を推し進めるべきだという意見の二つが出されました。

仕舞地謡の無本化については、予てより考えないでもなかったのですが、アマチュアがそこまでプロの真似をすることはあるまいと考えて、敢えて実行しなかったのですが、酔った勢いで、「よっしゃ、やったるか！」ということになってしまいました。

この夜の議論の結果、独吟については、最近、進境著しいOさんが「勸進帳」を引き受けて下さり、仕舞については、仕舞4番の地謡～梅のクセとキリ、砧・後と藤戸～を無本で謡うことになりました。

番組編成と同時に、ベテラン4人の方に声をかけて地謡をお願いしましたが、もっともらしい言い訳を言われて、お二人が辞退、記憶力優れたHさんと、場慣れ抜群のAさんに頼みこんで何とか体制を整えました。

地謡をお願いした皆様にとって、4曲の中での特別に難物であると言われているのは

「梅」のクセ。何しろ、「とのもりの とねりらが・・・」とか、「むかしの うずの ころばせ・・・」

等、謡本の詞章に慣れている筈のものも初めて出会う表現ですから覚えにくいこと！

砧などはどちらかと言えば謡い慣れていますから軽く考えていたのですが、昨日のこと、私一人で声を張り上げて、「因果の小車の・・・」という処を「因果は巡り合い・・・」と謡ってしまい、気が付いたら「鉄輪」になっていました。

高齢アマチュア集団による仕舞地謡の無本化は、実は大変なことなのです。

能楽雑感（126）～仕舞の地謡

2019年 09月 22日

昨年からご縁があって、白謡会が鎌倉文化祭に参加することになりました。発表は年一回で、今年は、11月8日（金）、長谷の鎌倉舞台で開催されることになっています。

鎌倉文化祭に参加する、アマチュアの会は、それぞれ極めてレベルが高くて、安易な気持ちで参加できません。

白謡会としては、今年は素謡・葛城に加えて、仕舞五番に出演することに致しました。仕舞の曲目は、演者のご希望に従って、道明寺、井筒、芭蕉・クセ、女郎花、富士太鼓の5曲です。

折角の機会ですから、仕舞の地謡は無本で謡おうと思い、無本の謡に比較的慣れているメンバーを選出、これから何回かの稽古に入りたいと思っています。

仕舞は、舞う人が主役であることは当然ですが、地謡方の居住まいも大切です。舞台上がってから、きちんと自分の位置を決めて着材、全員で扇を右側に揃え、やがて一斉に扇を前に出し、謡い出しの前にそれを持ち上げて膝の上に置いた後で、膝前に差し出す。

また、謡っているときには、視線を前に固定させる。退場の際も然り。これらの動作が、粛々とシンクロナイズしなくては、いくら、舞の人が頑張っても、舞台演劇としての完成度は低いものとなってしまいます。

アマチュアの舞台で、地謡をコピーした紙片を膝の前において謡う場面を往々にして見かけますが、こうすると地謡の人が前かがみの姿勢になって、とても爺臭い感じになってしまいます。

そこで、白謡会では、地謡の前にそれぞれ見台を置いて謡ってもらっていますが、これは謡う人の姿勢を少しでも見栄えよくしたいがための策でもあります。

しかし、無本での地謡は、本当に難しい！

年齢を重ねると共に覚えが悪くなるからです。特に、無本の場合の地頭の責任は重大です。私も今から、暗記を心掛けていますが、就中、難しいのが「芭蕉・クセ」。

これまで、何十年も謡ってきたのに、こんなに暗記し難い謡はありません。

本番が思いやられます。

仕舞雑感～右近（うこん）

2015年 12月 02日

仕舞の基本は「詞章を覚えること」であることは論を待ちませんが、そうはいっても遠い曲になると、素謡としては、同好会などでも馴染みが薄いので、改めて覚えるのはかなりの努力を伴うものです。

しかし、仕舞の詞章は、「狂い」は当然として、「クセ」にせよ「キリ」にせよ、その能の主軸であったり、全体を凝縮するものであったりしますから、読みこなすにつれて、ときに底知れない深みを感じる事が間々あり、それ故に、比較的覚えやすいと言えます。

そして、三番目（鬻物）のキリは、おしなべて、詞章が美しく、舞の形も優雅で、ゆったり、じっくりと舞わなくてはならず、故に難易度が高いように思われます。

来年の春の会に仕舞「右近」を上演される会員のために、この詞章の暗記を始めました。その節付けの妙と共に詞章の文ともいべき底深いものを感じました。

視覚的な抒情が表現されていることにかけては、私にとってのご当地ソング「六浦（むつら）」を超えるものはないと思っておりますが、「右近」は、それとは趣を異にして、天下泰平を謳いながらも、桜花爛漫の抒情を、視覚的な立体感を伴っていて、卓絶した表現です。

即ち、ところは桜花爛漫の平和な都、そして、花の蔭を映している池の水面。視線を上に移していくと、樹々の枝を伝っている小鳥が梢の方に移動して行き、やがて空に翔び発って行く。大空に浮かぶ白い雲・・・。

「六浦」も「右近」も、美しい詞章で日本の美を表現していて、暗記するに価値のある詞章です。

仕舞雑感～采女と山姥

2016年 06月 27日

昨日（6月25日）、国立能楽堂で開催されて「三人の会」を観に行きましたが、能3番の他に、仕舞3番が、観世流の代表者たちによって披露されました。即ち、大江山（鏡之丞）、采女キリ（清和）、山姥キリ（玄祥）でした。正直、3番とも感動はしませんでした。が、とても興味深く拝見しました。

観世清和師は、お家元の特権として、この手の舞台では、かなり自由な発想で舞をなさいますので括目して観させて頂きました。案の定、かなり興味深いものでした。

即ち、「鳥の声・・・で、サシた後、右に回って大小前に行きますが、これをかなり大きく、小角辺りまで膨らんで大小前に行き、更に此処で左右ではなく、一旦、正中近くまで詰めて、そのあとたらたらと下がった上で左右になりました。

シテ謡のあと、地の返しで六拍子となるところを、一切、拍子はなし。意外でした。

「石根・・・でサシて角に進み小回りしてそのあと、右、左と2足詰めて上げ扇、足拍子一つ（左）は一応、形通りではありますが、小回りのあとの足数が人によって異なりますので、通常3足+2足と自信おぼつかなくやっていた私は「え一つ、これで良かったんだ」と・・・

最後に近い「良く弔わせ・・・では、行きかかりでなく、右左と詰めながら、左手でアピールなさいました。

一方、玄祥師の山姥、巨体を駆使してさぞやお骨折りであろうと同情していましたが、鳥越苦勞でした、構えた途端、地謡の方が、玄祥師の扇を鹿背杖と交換、杖にすがって立ち上がり、以後、「峰に翔り・・・も下居はなし。

「山姥となれる・・・では、杖を胸元に斜交いに抱いてポーズしました。通常、扇を持ち、両の腕を広げるようにし、見栄をきるようにしますが、杖を抱くだけではシルエットが寂しくなりそうなところを、巨軀と演技力で、山姥の存在感を表現されました。さすがだと感じ入りました。

鹿背杖を使つての仕舞・山姥キリは、ご年配の方にも道を広げることになりそうです。